



佐世保と文学



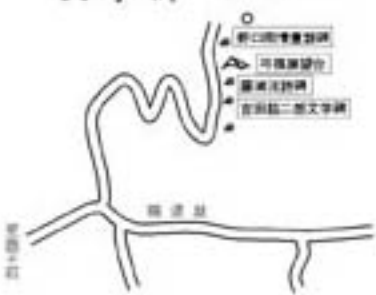
佐世保は歴史の浅い街で、文化の香りも少ないとよく言われます。しかし、戦前は多くの文学者が佐世保を訪れ、数々の文学作品や詩歌を残しています。また、戦後は日本を代表する文学者が佐世保から生まれ、活躍しています。今回は、市内に残る文学碑や作家ゆかりの場所を訪れ、佐世保と文学とのかわり方を考えてみました。



弓張展望台



弓張岳周辺の文学碑



急なヘアピンカーブの続く道を上りつめ、弓張岳の山頂に着きました。石段を上り休憩所のある広場に出ると、右手に展望台があります。展望台では、観光客が春霞にうつつすらと包まれた九十九島と、造船所のクレーンや艦船の並ぶ佐世保港のパノラマを楽しんでいます。



弓形の展望台は、三点支持という珍しい構造で、「海賊たちが竹槍を弓につがえて射た」という伝説にちなみます。夏は月影を作り、冬は烈風を避けられるように工夫されています。



野口雨情童謡碑

弓張岳は 弦なし 矢なし ただ空 見てる お天道さんに 矢と弦もらへ

【弓張岳】

文学碑を探しに展望台の下の広場を下りると、入り

口付近の木陰に、自然石でできた野

口雨情の童謡碑がありました。

野口雨情は、「七つの子」「赤い靴」「船頭小唄」など多くの童謡や民謡を作った詩人として有名です。雨情は2度佐世保を訪れ、佐世保ゆかりの4つの詩を作りました。【弓張岳】

「大野小学校校歌」「佐世保小唄」「佐世保メロデー」です。

最初に佐世保を訪れた昭和2年、大野小学校で「土の文学と童心芸術」という題の講演を行い、童謡の創作活動も兼ねて即興で前記の詩「弓張



旧大野小学校付近

「岳」を作りました。雨情が再び佐世保を訪れたのは、昭和6年のこと。佐世保で初めてのレコード歌謡「佐世保小唄」と「佐世保メロデー」を作るためでした。レコードが発売されると、「佐世保港を出てゆく船はね」可愛や佐世保に呼びかけて 来い来いだよ付いて来な」で始まる「佐世保小唄」の唄と踊りで、佐世保の街はにぎわったということです。

藤浦洸の詩碑



空いっばいに 空があるように 海いっばいに 海があるように 人よ 心いっばいに 美しい心をもって この空を この海を この土を 愛そう

展望台の下を海の見える方へ回り込むと、小さな散歩道に沿って文学碑が並んでいます。その中に「藤

浦洸の詩碑」を見つけました。この詩は、平戸出身の藤浦洸が、西海国立公園指定10周年を記念して作りしました。團伊玖磨が曲をつけて「西海讃歌」となり、九十九島の大自然を謳う歌として、多くの市民に愛唱されています。

吉田弦二郎文学碑



ふるさとの 春の山こそ なつかしき、 むさし野の 雪に降りし あれば

この碑は散歩道の一歩下にあります。吉田弦二郎は日本浪漫派の代表的な作家で、明治の鎮守府開庁のころ、佐世保で少年期を過ごしました。ここでヒバリの声を聞きながら、春風にそよぐ翁草の花の中に座って、九十九島の景色をばんやりと眺めていたそうです。



弓張岳の歌碑は、どれも佐世保の自然の素晴らしさを詠ったものです。

美しき天然歌碑



今度は弓張岳を下りて、街の中の文学碑を見てみるね。



空にさえずる 鳥の声 峰より落つる 滝の音 大波小波 とうとうと 響き絶えぬ 海の音

八幡神社の鳥居の前から、佐世保北高校への坂道を上って行くと、左手に佐世保福祉会館があります。その先の民家のカイズカの生け垣をくり抜くようにして、「美しき天然」の歌碑が立っていました。

この曲は、武島羽衣の詩に、第3代佐世保海兵団軍楽長・田中穂積が、私立佐世保女学校の音楽の教材用として、明治35年に作曲しました。

この曲はサーカスのジンタで有名ですが、また近年の研究で、朝鮮半島を経て、中央アジアまで伝わり、望郷の詩として歌われていることがわかりました。



現在の京町通り △大正時代の夜店通り

五足の靴文学碑



四ヶ町アーケードの下京町側の入り口前に、三角形の公園があり、その一角に「五足の靴文学碑」を見つけた。

明治45年の夏、早稲田大学在学中の北原白秋が、与謝野寛（鉄幹）など4人の詩人を招き、九州各地を旅し、その紀行文を新聞に連載したのが、「五足の靴」です。一行は佐世保にも立ち寄り、詩と文章で当時の庶民生活を生きたと描いています。そのころ、林芙美子が八幡小学校に通い、後に「放浪記」の中で、「佐世保の女は美しい」と書いています。